

神戸大学大学院経済学研究科・国際協力研究科におけるゼミ（演習）を希望される方へ（2026年度）

2026年1月 村上善道

ゼミの内容

ゼミでは開発経済学または国際貿易（外国直接投資、グローバル・バリューチェーン(GVC)等も含む）に関するミクロ実証研究を行うためのスキルを学びます。M1では「因果推論」に関する基本的なテキストと各自のテーマに基づくジャーナル論文の輪読を行いながら、実際にデータ分析を行うためのスキルを学ぶ予定です。参加学生への要望は 1)経済学研究科の場合は後期課程進学非希望者の場合も計量経済学 A・B を履修すること、2)後期課程進学希望者の場合は修士論文を原則的に英語で執筆することの 2 点です。

上記に関する補足

- ・因果推論のテキストとしては昨年度に引き続き以下を予定しています。

Cunningham, Scott 著; 加藤真大[ほか]『翻訳因果推論入門：ミックスステップ：基礎から現代的アプローチまで』技術評論社 2023 年

英語版では以下で読めます。

<https://mixtape.scunning.com/>

また Stata や R 等の統計ソフトのファイルなども以下で公開しています。

<https://github.com/scunning1975/mixtape/tree/master/>

この教科書は説明が丁寧で、上記の通り、統計ソフトのコードも公開されているので、実証を学びたい人に向いていると思います。ただし、いろいろと間違いがあることが分かっており、「間違え探し」をするつもりでゆっくり丁寧に読む必要があります。

・入学時点での経済学の特定科目に関する履修は問いません。それよりも問題意識ややりたいテーマが明確であることと入学後、経済学研究科におけるコースワークに誠実に取り組むが重要と考えます。特に、計量経済学は、実証研究を行う上で最も大切な科目ですので、修士課程（博士課程前期課程）で修了する学生の方にも、経済学研究科の場合は「基礎計量経済学」だけではなく後期課程進学者の修了要件になっている「計量経済学 A」「計量経済学 B」の履修をお願いしています。また実証分析を行う上で計量ソフトの使い方を習得することも必須になりますので、Stata の基本的な操作については前述の「因果推論」のテキストを輪読しながら私からも教えますが、必要に応じて「ミクロデータ分析」等の履修もお願いしています。

・現在、私のゼミでは、博士課程後期課程進学希望者および博士課程後期課程の院生に対して、国際ジャーナルに論文を投稿するための積極的なサポートを行っており、実際に最初の指導院生の修士論文を改定したものが、査読付き国際ジャーナルに掲載されています。研究者を志望するのであれば、国際ジャーナルへの掲載をめざして研究を行うことが不可欠で

あり、そのためには修士論文の段階から英語で書くことが望ましいと考えています。博士課程前期課程で修了する場合も、修士論文を英語で執筆することを推奨しています。英語に関しては、私のほうでも添削を行います。

※なお、2026 年度より、私が国際協力研究科の「地域開発論演習」を担当することになりましたので、同演習への参加者がいる場合は、経済学研究科の「演習・特殊研究」と合同で行う予定です。

ゼミにおいて指導可能な研究領域について

開発経済学または国際貿易に関するミクロ実証研究になります。

- ・開発経済学に関しては、具体的には労働市場に関する家計調査データを用いたミクロ実証研究（教育が賃金格差に与えた影響等）がこれまで私が主に行ってきたテーマになります。
- ・国際貿易の実証に関しては、重力方程式を用いた地域貿易協定の「深さ」が GVC 貿易に与えた影響に関する研究、企業データを用いた GVC 参加が外資企業の現地調達に与えた影響に関する研究、家計調査データを用いた貿易自由化が所得格差や賃金格差に与えた研究などがこれまで私が行ってきたテーマになります。

こういったテーマに関心のある方にはこのゼミとの適合は高いとおもいます。なお、具体的な因果推論の手法としては、私およびこれまでの指導院生が使用してきた手法としては、Difference-in-differences (DID)、イベントスタディ、操作変数法、傾向スコアマッチングなどが中心になります。加えて、サンプルセレクションモデル・トービットモデルなどの非線形モデルや、分位点回帰なども使用頻度の高い手法になっています。

対象とする地域に関しては、私はこれまで大学院入学以来、一貫してラテンアメリカを対象とした実証研究を行ってきましたので、私のゼミには、ラテンアメリカに関する研究に比較優位があります。しかし、分析手法自体には普遍性があると考えますので、ラテンアメリカ以外の国・地域のマイクロデータを使用した研究やクロスカントリーのデータを使用した研究でも指導は可能です。ただし、ラテンアメリカ以外の国・地域のデータ、特に英語またはスペイン語以外の言語で書かれたマイクロデータを使用する場合は、ゼミ生の方でデータ入手と質問票の解読は責任をもって行っていただく必要があります。

なお私は実証研究を専門にしていますが、これまでやってきた研究はマイクロデータを含めすべて二次データを使用したものであり、現地にてフィールドワークを行って収集したものではありません。現在、私は複数の二次データをうまく組わせてできるだけユニークな実証研究を行うという問題意識で研究を行っています。特に修士課程においては、実際に現地に行ってデータを独自に収集することは現実的でなく、ゼミ生の皆さんも二次データを

使用することを前提に、データの収集、クリーニング、データセットの構築を正確に行い、それを用いて基本的な因果推論を用いて、実証研究を行うことができるように指導を行っています。

いずれにしても、指導教員とのミスマッチを避けるためにも、ゼミを希望する方の研究テーマ・方法論が私で指導可能であるかは、しっかりと事前に話を聞いて確認する必要があります。経済学研究科・国際協力研究科の博士課程前期課程への入学が決まり私のゼミに参加することを考えている方は、メールでアポイントをとってオフィスアワーに来ていただくようお願いいたします。

博士課程後期課程について

以下では、博士課程後期課程に内部進学する場合について書きます。博士課程後期課程から編入する場合は、別途相談してください。私が主査として博士論文の審査を行う場合、(本学経済学研究科・国際協力研究科における博士論文で通常そうであると思いますが) 基本的に最低3本の論文の執筆を求めます。より詳細には、

- ・修士論文を改定し査読付き国際ジャーナルに投稿すること。希望があれば、私が第二著者として加わり改訂を手伝います。
- ・最低1本（もちろん2本であれば望ましい）、ジョブマーケットペーパーとなりうる、因果推論に基づく実証論文を単著で執筆すること。
- ・残りの1本については、必ずしも因果推論といえる研究でなくても構わない。

前述の通り国際ジャーナルに論文を投稿するためのサポートを積極的に行いますが、博士論文の提出において、それを構成する論文が「査読付き国際ジャーナルにアクセプトされること」は特に要件としません。これまでの私の経験を振り返っても、ジャーナルにアクセプトされるか否かは運にも左右されますし、また博士課程後期課程の段階であせって業績を作るために、無理にアクセプトされやすそうなジャーナルに出す必要もないと考えるためです。また、博士論文が全体として一つの話になっていることも取り立てて求めません。テーマや対象があまりにバラバラであるのは困りますが、ある程度の範囲に収まっていれば、いわゆる”Three Essays...”タイプの博士論文で構いません。それよりも、博士論文を構成する各章のジャーナルに投稿する論文としての完成度を重視します。博士論文は原則的に英語で執筆することを求めます。

ゼミ生の状況

このゼミは2021年度から開講した新しいゼミですので、まだ修了者は多くはありません。修士論文のタイトルと博士課程後期課程に進学の場合は、進学後の主な研究テーマを以下で記載します（第二ゼミとして参加せず、副査のみを行った場合は記載していません）。

修了年月	修士論文タイトル	博士課程後期課程進学の場合、進学後の主な研究テーマ
2023.9	地域経済統合の「深さ」が日本の対外直接投資に及ぼす影響*	
2024.3	The Impacts of Land Reforms on Land Productivity in Cuba: Evidence from Crop-Level Panel Data	キューバにおける農地改革が子供の健康に与えた影響
2025.3	The Impacts of FDI on Income Inequality: Evidence from Developing Countries	米中貿易戦争が中国の所得格差に与える影響
2026.3 (予定)	Determinants of Early Pension Withdrawal and Its Effects on Labor Supply in Chile	

*は第二ゼミ・副査として指導

現在までのところ、第二ゼミ・副査としての指導を含めて4名が修了（予定）であり、ゼミ生の研究テーマとしては、開発経済学関係と国際貿易関係が1対1の比率になっています。